

## 巻頭言

### 〈小特集〉「暴力からの人間存在の回復」研究会ワークショップ 「メルロ＝ポンティとレヴィナス—愛、平和、正義」

今回の紀要に収録された以下の論文、松葉類「レヴィナスの有限責任論について—制度における主体性の問い」、川崎唯史「メルロ＝ポンティの戦後—暴力と平和をめぐる」、酒井麻依子「メルロ＝ポンティにおける嫉妬と愛」は、立命館大学人文科学研究所重点研究プロジェクト「暴力からの人間存在の回復」において開催されたワークショップ「メルロ＝ポンティとレヴィナス—愛、平和、正義」での発表をもとにした論文である。本ワークショップは2015年10月17日（土）午後1時30分より、衣笠キャンパス学術館第二研究会室で開催された。コメンテーターとして藤岡俊博氏（滋賀大学経済学部准教授）と加國が参加した。

このワークショップは、「愛」「平和」「正義」という、ともすれば表面的な美しい言葉として、最悪の場合は偽善的に使用される概念について、メルロ＝ポンティとレヴィナスという戦後フランスを代表する哲学者がどのように思索をしたのかということ、若手の研究者たちが真剣に討議をする場となった。

松葉氏はレヴィナスにおける「責任」の概念をめぐり、他者への無限責任と制度における有限責任の両面において主体の責任を考える必要があることを指摘した。従来、倫理学あるいは形而上学として語られるレヴィナスにおける他者への無限責任は、現実の制度の中で主体が引き受けなければならない有限責任との関係において考えられねばならないのである。

川崎氏はメルロ＝ポンティにおける「暴力」と「平和」の議論を、特に戦後期の政治論文などを中心に提起、メルロ＝ポンティが「暴力」と「平

和」を単純に対立させたり、「平和」を根源的なものとしたりしていたのではなく、暴力と平和が人間において分かち難く絡み合っている以上、その絡み合いを見据えながら歴史の偶然性の中で実現される「実効的平和」と呼ぶべきものを考えていたことを示すものであった。

酒井氏はメルロ＝ポンティの講義録等を丹念に分析しながら、メルロ＝ポンティにおける愛と嫉妬の関係が自他未分化の幼児的で暴力的な愛として生じるような場合と自他の区別に基づいた真の愛として生じるような場合が区別して議論されていることを指摘し、「愛」が「暴力」と化す場合とそうでない場合との他者との関係性の構造こそがメルロ＝ポンティの他者論の本質であることを示した。

以上に述べられた通り、「愛」や「平和」や「正義」について、それを単純に美化して称揚することも、逆にその偽善を誹り、ニヒリズムに陥ることも拒み、その両義性を熟視しながら現実的な人間の生の中で実現される可能性を模索することの重要性が、このワークショップを通じて示されたと言えよう。

本ワークショップは発表者の一人でもあった酒井麻依子氏（立命館大学大学院文学研究科博士後期課程）のコーディネートによって実現した。ワークショップの趣旨設定、発表者、コメンテーターの選出と依頼、広報等、酒井氏の努力がなければ本ワークショップは実現しなかっただろう。昨年度に引き続き、若手によるこのような有意義なワークショップを開催できたことは、若手研究者の研究支援をめざす本研究プロジェクトにとっても大きな成果であった。

2017年3月

加國 尚志（立命館大学文学部教授）